

第34回 医療体育研究会

第17回 日本アダプテッド体育・スポーツ学会

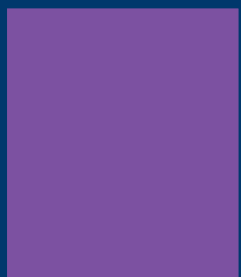
第15回 合同大会 SENDAI 仙台大会 2013

「生きている」から「生きていく」へ  
～医療体育・アダプテッドスポーツが日常を変える～



会期 2013年 12月7日(土)・8日(日)

会場 東北文化学園大学  
〒981-8551 仙台市青葉区国見6-45-1



主催 医療体育研究会、日本アダプテッド体育・スポーツ学会

共催 東北文化学園大学

第34回医療体育研究会  
第17回日本アダプテッド体育・スポーツ学会

---

# 第15回 合同大会 仙台大会



「生きている」から「生きていく」へ  
～医療体育・アダプテッドスポーツが日常を変える～

会期 2013年 12月7日(土)・8日(日)

会場 東北文化学園大学  
〒981-8551 仙台市青葉区国見6-45-1

主催 医療体育研究会  
日本アダプテッド体育・スポーツ学会

共催 東北文化学園大学

大会事務局

リハビリテーション体育 Reproud

# INDEX

ご挨拶	2
• 医療体育研究会会長	
• 日本アダプテッド体育・スポーツ学会会長	
• 第15回合同大会実行委員長	
大会概要	5
交通のご案内・会場全体図	6
会場案内図	7
参加者へのご案内	8
発表者へのお知らせとお願い	10
座長の先生方へのお知らせ	11
各理事、編集委員の方へのお知らせ	11
日程表	12
大会プログラム	13
抄録集	21
• 特別講演	
• シンポジウム	
• 一般演題	
両会の紹介	52
• 医療体育研究会	
• 日本アダプテッド体育・スポーツ学会	
共催・後援	54
協賛企業・団体	54
大会実行委員会	55

## 交通のご案内・会場全体図

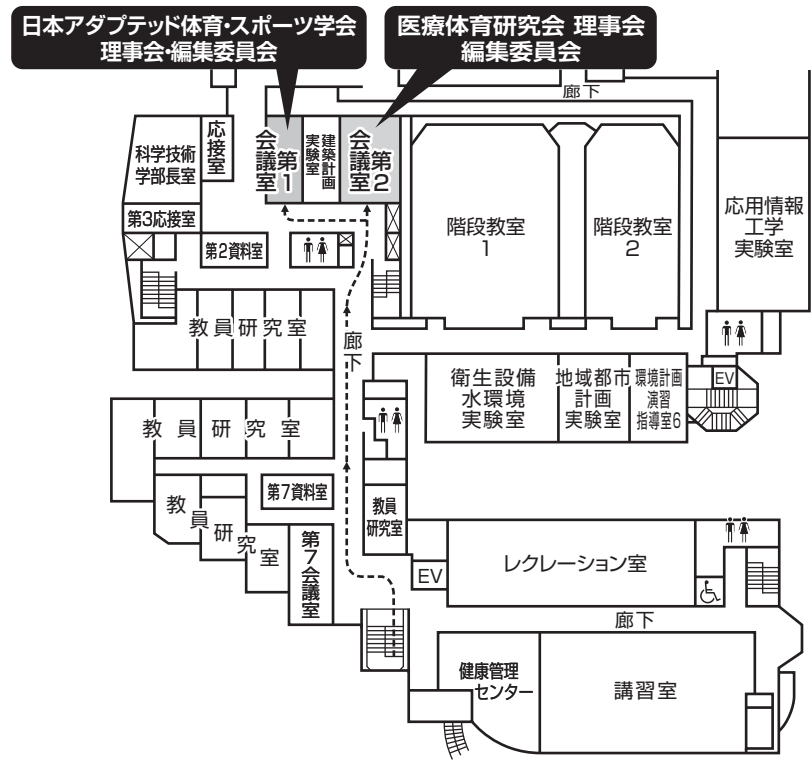


- JR 利用：仙台駅乗車→国見駅下車  
JR 仙山線、所要時間約 15 分、  
国見駅下車徒歩 3 分、料金は 190 円です。
- 仙台市営バス利用：仙台駅前乗車  
仙台駅西口バスプールの 15 番停留所から  
「南吉成・国見ヶ丘一丁目行き」か  
「南吉成・中山台・実沢(営)行き」に  
乗車、「東北文化学園大学前」で下車します。  
所要時間は 30 分、料金は 290 円です。

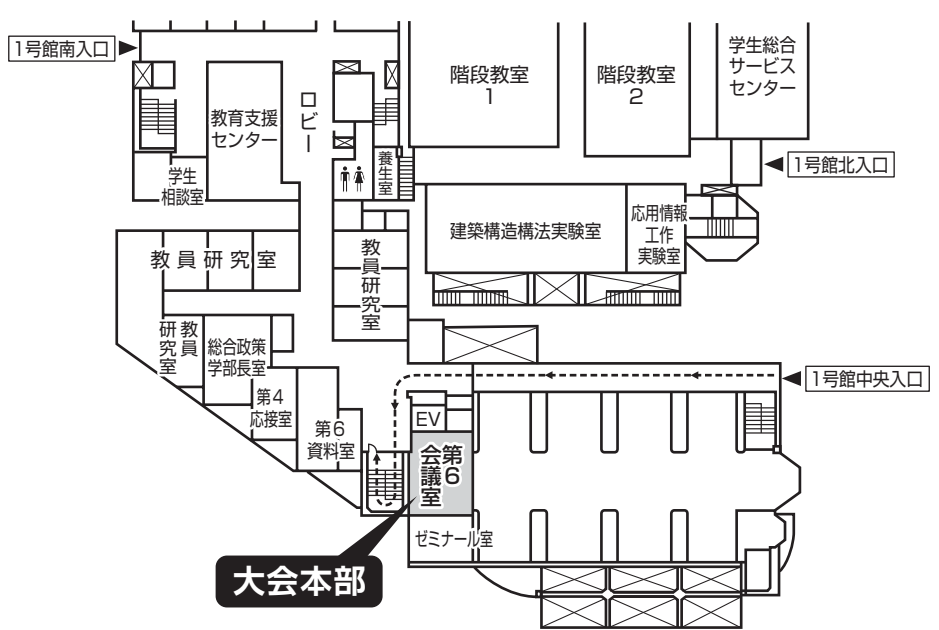


# 会場案内図

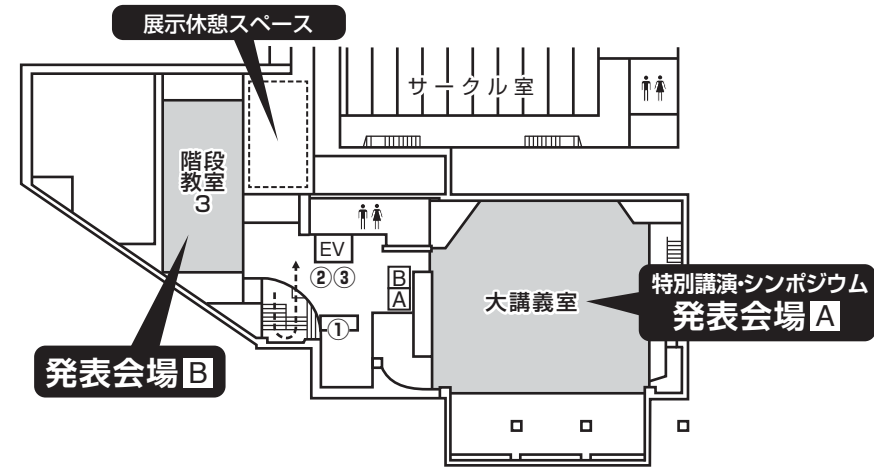
**2F**



**1F**



**B1F**



- ①…受付
- ②…日本アダプテッド体育・スポーツ学会ブース
- ③…医療体育研究会ブース
- A~B…展示・販売ブース

# 日 程 表

**1日目** 2013年 12月 7日 土

	A 会場 B1F 大講義室	B 会場 B1F 階段教室 3	2F 第1・2会議室
9:00	9:00~ 開 場、受 付 (地下1階)		
10:00	9:30~9:40 開会宣言・諸注意	9:30~9:40 開会宣言・諸注意	
	9:40~10:40 一般演題 1 座長：藤田 紀昭 同志社大学	9:40~10:40 一般演題 2 座長：齊藤 まゆみ 筑波大学体育系	
11:00	10:50~11:50 一般演題 3 座長：金山 千広 神戸女学院大学	10:50~11:50 一般演題 4 座長：田中 信行 日本体育大学	
12:00	12:10~13:10 昼 食		12:10~13:10 理 事 会
13:00	12:30~13:20 講演聴講参加者受付 (地下1階)		日本アダプテッド体育・スポーツ学会 理事会・編集委員会 会場：第1会議室
	13:20~13:30 開会行事		
14:00	13:30~15:00 特別講演 メタボリックシンドローム予防・ 改善のための食事と運動 座長：植木 章三 東北文化学園大学 演者：中田 由夫 筑波大学医学医療系		医療体育研究会 理事会 会場：第2会議室
15:00	15:10~16:40 シンポジウム 医療体育・アダプテッドスポーツ で日常が変わる 座長：高戸 仁郎 岡山県立大学		
16:00			
17:00	16:50~17:20 日本アダプテッド体育・スポーツ学会 総会	16:50~17:20 医療体育研究会 総会	
18:30~ 懇 親 会 会場：DUCCA 仙台駅前店			

**2日目** 2013年 12月 8日 日

	A 会場 B1F 大講義室	B 会場 B1F 階段教室 3	2F 第1・2会議室
9:00	9:00~ 開 場、受 付 (地下1階)		医療体育研究会 編集委員会
10:00	9:30~10:45 一般演題 5 座長：安井 友康 北海道教育大学札幌校	9:30~10:45 一般演題 6 座長：大仲 功一 志村大宮病院	12:10~13:10 会場：第2会議室
	10:55~12:10 一般演題 7 座長：澤江 幸則 筑波大学体育系	10:55~12:10 一般演題 8 座長：梅崎 多美 国立障害者リハビリテーションセンター学院	
12:00	12:20~12:30 閉会式		

# 第1日目 12月7日(土)

## 開場、受付

9:00～ 会場：受付(地下1階)

## 開会宣言・諸注意

9:30 会場：A会場(大講義室)・B会場(階段教室3)

## 一般演題1

9:40～10:40 会場：A会場(大講義室)

座長：藤田 紀昭(同志社大学)

### 01 ナショナルチームを対象とした継続的な心理サポートの効果に関する研究

○中山 正教<sup>1)3)</sup>、山崎 将幸<sup>2)3)</sup>

- 1)西九州大学 健康福祉学部、2)九州大学、  
3)日本パラリンピック委員会医・科学・情報サポート推進委員

### 02 伴走者の位置が視覚障がい者ランナーに与える影響 パラリンピック出場選手と一般ランナーの比較

○湯川 静信<sup>1)</sup>、矢部 京之助<sup>2)</sup>

- 1)大阪国際大学、2)名古屋大学名誉教授

### 03 障害者のスポーツ現場におけるトレーナーの必要性について

○田中 利明

大阪ハイテクノロジー専門学校

### 04 EMSの利用が障がいのある大学陸上競技選手の術後回復過程におよぼす影響

○岩岡 研典、曾根 裕二

大阪体育大学 健康福祉学部

## 一般演題2

9:40～10:40 会場：B会場(階段教室3)

座長：齊藤 まゆみ(筑波大学体育系)

### 05 知的障害を伴う自閉症生徒に対する姿勢模倣力向上に向けた取組 一個々のトレーニング期間の事例的検討

○加藤 琢也<sup>1)</sup>、安井 友康<sup>2)</sup>

- 1)北海道教育大学附属特別支援学校、2)北海道教育大学札幌校

- 06** 自閉症スペクトラム障害児の投スキルについて  
～運動活動実施期間中の質的变化に着目して～  
○澤江 幸則<sup>1)</sup>、村上 祐介<sup>2)</sup>、杉山 文乃<sup>3)</sup>、土井畑 幸一郎<sup>3)</sup>  
1) 筑波大学体育系、2) 筑波大学大学院体育科学専攻、3) 筑波大学大学院体育学専攻
- 07** ボッチャ選手の競技力と投球距離の関係  
○奥田 邦晴<sup>1)</sup>、片岡 正教<sup>1)</sup>、島 雅人<sup>1)</sup>、岡原 聡<sup>1)</sup>、下野 貴之<sup>1)</sup>、河合 俊次<sup>2)</sup>、  
村上 光輝<sup>3)</sup>  
1) 大阪府立大学大学院 総合リハビリテーション学研究科、2) 大阪市更生療育センター、  
3) 福島県立石川養護学校
- 08** 脳血管障害片麻痺者の錘装着による水中歩行への影響  
○松浦 綾乃、梅崎 多美  
国立障害者リハビリテーションセンター学院 リハビリテーション体育学科

### 一般演題3

10:50～11:50 会場：A 会場（大講義室）

座長：金山 千広（神戸女学院大学）

- 09** 発達障害児のための効果的な運動指導法についての実践的研究(2)  
自閉症スペクトラム障害児を対象に  
○村上 祐介<sup>1)</sup>、澤江 幸則<sup>2)</sup>、杉山 文乃<sup>1)</sup>、土井畑 幸一郎<sup>1)</sup>  
1) 筑波大学大学院、2) 筑波大学体育系
- 10** 知的障がい者サッカー振興事業（Friendly Action）が参加者の身体機能に及ぼす効果に  
関する研究  
○島 雅人<sup>1)2)</sup>、山田 隆人<sup>1)</sup>、足立 一<sup>1)</sup>、井口 知也<sup>1)</sup>、柳 千磨<sup>1)</sup>、片岡 正教<sup>2)</sup>、  
奥田 邦晴<sup>2)</sup>  
1) 大阪保健医療大学 保健医療学部、2) 大阪府立大学大学院 総合リハビリテーション学研究科
- 11** 重度肢体不自由者のスポーツ継続に関する事例的研究  
～ボッチャ愛好家へのグループインタビューから～  
○曾根 裕二  
大阪体育大学 健康福祉学部
- 12** 特別支援学校へのトランポリン導入過程に関する史的  
研究  
○土井畑 幸一郎<sup>1)</sup>、澤江 幸則<sup>2)</sup>、齊藤 まゆみ<sup>2)</sup>  
1) 筑波大学大学院、2) 筑波大学体育系



## 一般演題4

10:50～11:50 会場：B会場（階段教室3）

座長：田中 信行（日本体育大学）

### 13 介護予防事業におけるスポーツレクの有用性

○田村 邦彦  
医療法人社団 土合会 渡辺病院

### 14 屋外型高齢者遊具を利用した運動教室の開催と遊具利活用に関する課題

○伊藤 秀一<sup>1)</sup>、植木 章三<sup>2)</sup>、芳賀 博<sup>3)</sup>、一木 誠<sup>4)</sup>  
1) リハビリテーション体育 Reproud、2) 東北文化学園大学大学院 健康社会システム研究科、  
3) 桜美林大学大学院 老年学研究科、4) 株式会社コトブキ

### 15 リハビリ特化型短時間デイサービス利用者の身体機能と体成分の変化

○武藤 理<sup>1)</sup>、國井 崇洋<sup>2)</sup>、横田 直也<sup>1)</sup>  
1) フロイデ総合在宅サポートセンターひたちなか、  
2) フロイデ総合在宅サポートセンター水戸河和田

### 16 高齢者における森林浴が生体に及ぼす生理学的影響

○近藤 照彦、武田 淳史  
東京医療学院大学保健医療学部リハビリテーション学科

## 昼食・理事会

12:10～13:10 医療体育研究会 理事会 会場：第2会議室（2階）

日本アダプテッド体育・スポーツ学会 理事会 会場：第1会議室（2階）  
編集委員会 会場：第1会議室（2階）

## 講演聴講参加者受付

12:30～13:20 会場：受付（地下1階）

## 開会行事

13:20～13:30 会場：A会場（大講義室）

## 特別講演

13:30～15:00 会場：A会場（大講義室）

座長：植木 章三（東北文化学園大学）

## 〔メタボリックシンドローム予防・改善のための食事と運動〕

中田 由夫 筑波大学医学医療系

## シンポジウム

---

15:10～16:40 会場：A会場（大講義室）

座長：高戸 仁郎（岡山県立大学）

### 〔医療体育・アダプテッドスポーツで日常が変わる〕

#### S1 スポーツと共に生きる

酒井 徹 SUPERSONIC 代表

#### S2 「日常から非日常へ」～支援学校高校生。健康増進センターと踊ってみた。～

若山 洋 （元）宮城県立光明支援学校 特別支援教育コーディネーター 教諭

村上 恵 公益財団法人仙台市健康福祉事業団 仙台市健康増進センター 運動指導員

#### S3 被災地での運動支援リーダーの活動について

坂本 博光 山元町 運動支援リーダー

## 総 会

---

16:50～17:20

医療体育研究会 総会

会場：B会場（階段教室3）

日本アダプテッド体育・スポーツ学会 総会

会場：A会場（大講義室）

## 懇 親 会

---

18:30～

会場：DUCCA 仙台駅前店（宮城県仙台市青葉区1丁目10-23 5F）

## 第2日目 12月8日(日)

### 開場・受付、編集委員会

---

9:00～ 会場：受付(地下1階)  
医療体育研究会編集委員会 会場：第2会議室(2階)

### 一般演題5

---

9:30～10:45 会場：A会場(大講義室) 座長：安井 友康(北海道教育大学札幌校)

#### 17 障がい者スポーツの体験は子どもたちの障がい理解を促進するか

○国永 英代<sup>1)</sup>、曾根 裕二<sup>2)</sup>、岩岡 研典<sup>2)</sup>

1) 珠洲市立 上戸小学校、2) 大阪体育大学 健康福祉学部

#### 18 教養教育の一環としてのアダプテッド・スポーツ教育 第1報

○岡川 暁<sup>1)</sup>、田引 俊和<sup>2)</sup>

1) 日本福祉大学 健康科学部、2) 北陸学院大学 人間総合学部

#### 19 アダプテッドスポーツを取り入れた授業の効果と可能性 ～高等学校の授業実践から～

○小林 伸行

神奈川県立横須賀明光高等学校

#### 20 大学・短期大学における体育実技での障害学生の受け入れ体制に関する現状報告

○栗原 浩一<sup>1)2)</sup>、齊藤 まゆみ<sup>3)</sup>、澤江 幸則<sup>3)</sup>、及川 力<sup>1)</sup>、天野 和彦<sup>1)</sup>、香田 泰子<sup>1)</sup>、  
中島 幸則<sup>1)</sup>

1) 筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター、2) 筑波大学大学院 体育研究科、  
3) 筑波大学 体育系

#### 21 資格取得を目的とした体育・スポーツ専攻大学生の現場実習に対する受入施設の意識

○田中 信行

日本体育大学 大学院

### 一般演題6

---

9:30～10:45 会場：B会場(階段教室3) 座長：大仲 功一(志村大宮病院)

#### 22 スポーツ団体に所属している慢性脊髄損傷者の褥瘡と自己効力感の特徴

○松井 伸子

東京医療学院

- 23** 一般小型活動量計を使用した重症心身障害者の身体活動量測定を試み  
○近藤 尚也  
札幌あゆみの園
- 24** 運動介入による高齢者の起居動作の変容  
○野口 理紗<sup>1)</sup>、高橋 勝美<sup>1)</sup>、種市 和香子<sup>2)</sup>、五十嵐 裕美<sup>3)</sup>、渡邊 紳一<sup>1)</sup>、小川 喜道<sup>1)</sup>  
1) 神奈川工科大学 創造工学部、2) 神奈川工科大学 健康福祉支援開発センター、  
3) ランダルコーポレーション
- 25** 膝関節へのテーピング施術経験の違いはどこに影響するか?もしくは影響しないか?  
○渡邊 紳一<sup>1)</sup>、砂川 憲彦<sup>2)</sup>、高橋 勝美<sup>1)</sup>  
1) 神奈川工科大学 創造工学部、2) 帝京平成大学 現代ライフ学部
- 26** 垂直跳びにおける下肢筋力の貢献度 —男女の特性比較—  
○大場 友裕  
社会福祉法人 京都博愛会 京都博愛会病院 リハビリテーション科

## 一般演題7

10:55～12:10 会場：A 会場（大講義室）

座長：澤江 幸則（筑波大学体育系）

- 27** 日本障害者スポーツ協会公認障害者スポーツ指導員の実態に関する研究  
—2002年調査と2012年調査の比較から—  
○藤田 紀昭<sup>1)</sup>、奥田 睦子<sup>2)</sup>  
1) 同志社大学、2) 金沢大学
- 28** アダプテッド体育・スポーツの視点をもった指導者を育てるために  
○齊藤 まゆみ、澤江 幸則  
筑波大学体育系
- 29** 知的障害者のスポーツ活動における指導記録の記述傾向と実践効果に関する検討  
○大山 祐太  
北海道教育大学 岩見沢校
- 30** 公共スポーツ施設と障害者のサービス評価  
—利用システムの違いに伴う利用満足への影響要因—  
○金山 千広<sup>1)</sup>、山崎 昌廣<sup>2)</sup>  
1) 神戸女学院大学、2) 広島大学総合科学研究科
- 31** スポーツにおける当事者研究の研究方法についての考察 —聴覚障害者の場合—  
○渡辺 儀一  
東洋大学大学院

## 一般演題 8

10:55～12:10 会場：B 会場（階段教室3） 座長：梅崎 多美（国立障害者リハビリテーションセンター学院）

### 32 第7回アジア太平洋ろう者競技大会帯同報告

○平田 昂大<sup>1)</sup>、中島 幸則<sup>2)</sup>

- 1) 医療法人社団紺整会 船橋整形外科病院 アスレティックトレーニング部、
- 2) 国立大学法人 筑波技術大学 障害者基礎教育研究部 聴覚障害教育実践部門

### 33 アンプティサッカーワールドカップロシア大会帯同報告

○坂光 徹彦<sup>1)2)</sup>、木村 浩彰<sup>1)</sup>、三上 幸夫<sup>1)</sup>、平田 和彦<sup>1)</sup>、杉野 正幸<sup>2)</sup>

- 1) 広島大学病院 診療支援部 リハビリテーション部門、2) 日本アンプティサッカー協会

### 34 ドイツにおける障害者の地域スポーツ指導者養成制度と活用システム

○奥田 睦子

金沢大学

### 35 アダプテッド体育・スポーツ国際ワークショップの成果と課題

○安井 友康<sup>1)</sup>、山本 理人<sup>2)</sup>、奥田 知靖<sup>2)</sup>、大山 祐太<sup>2)</sup>、近藤 尚也<sup>3)</sup>、谷口 広明<sup>3)4)</sup>、加藤 琢也<sup>5)</sup>、中道 莉央<sup>1)</sup>

- 1) 北海道教育大学札幌校、2) 北海道教育大学岩見沢校、3) 札幌あゆみの園、
- 4) 北海道美唄養護学校、5) 北海道教育大学附属特別支援学校

### 36 障がい者スポーツに関する新聞報道の変遷 —パラリンピックの新聞報道に着目して—

○山下 勝也<sup>1)</sup>、藤田 紀昭<sup>2)</sup>

- 1) 同志社大学スポーツ健康科学研究科、2) 同志社大学スポーツ健康科学部

## 閉会式

12:20～12:30 会場：A 会場（大講義室）

**特別講演**

**シンポジウム**

## メタボリックシンドローム予防・改善のための食事と運動

中田 由夫

筑波大学医学医療系

メタボリックシンドロームは、内臓脂肪の過剰蓄積に加え、血圧高値、脂質代謝異常、高血糖の3つのうち2つ以上を保有する状態を指し、将来の循環器疾患による死亡リスクを高めることから、その予防・改善策を講じることが重要である。多くの場合、食事の過剰摂取と身体不活動が主因であることから、その改善には食事改善や運動実践が有効である。このことは、専門家だけではなく、国民の多くが理解しているが、実践できている人は必ずしも多くない。

我々は、肥満者に対する食事改善と運動実践による減量効果を検証する研究に長年携わっており、3ヵ月間で平均8kgの減量を可能とする減量プログラム「スマートダイエット」を開発している。3,000名を超える方々の減量支援に関与してきた経験から、「脳(あたま)の減量(ダイエット)スイッチをONにする」ことが、減量成功につながると考えている。すなわち、「分かっているけど生活を変えられない」状態から「生活をしっかり変えていく」状態に、いかにスイッチをONにするかが重要なのである。

1. 現状把握
2. 気づきと目標設定
3. 決断と動機付け
4. 食事改善の実行・徹底
5. 運動の実践(楽しむこと)

以上が、スマートダイエット成功への5か条である。

現状把握のためには、まずは健診を受けて、自身の健康状態を知ることが必要である。簡便な手段として、体格指数(body mass index: BMI)が25を

上回っているかどうか、腹囲が男性85 cm、女性90 cmを上回っているかを確認することから始めてもよい。減量の必要性が高いと感じれば、その程度に合わせて減量目標を設定する。我々の研究では、メタボリックシンドローム構成因子を保有する肥満者が、3ヵ月間で保有する因子の数を減らすためには、体重の8%以上の減量を達成することが、その成功率を高める条件となることが示されている<sup>1)</sup>。そうした情報を参考にしながら、現在の体重の5%から15%の範囲内で、短期的な(3ヵ月程度の)減量目標を設定する。さらなる減量が必要な場合には、肥満の判定基準となっているBMI 25に相当する体重や自身の20歳時体重などを考慮して、長期的な減量目標をあわせて設定する。数値目標が設定できれば、次は行動目標を設定する。この目標設定に際して、「必ず減量を達成する」という自身の決断がなければ、「分かっているけど生活を変えられない」状態からの脱却は不可能である。そのための動機付けとして、肥満を解消するためのエネルギー収支の考え方を分かりやすく説明し、減量のための生活改善の方法を具体的にイメージしてもらえるように導くことが重要である。

我々のこれまでの研究成果から、3ヵ月間の体重減少量は、食事改善単独で約7kg、食事改善と運動実践を組み合わせることで8~9kgとなり、比較的短期間の減量期間では、運動実践よりも食事改善の効果が大きいことが示されている<sup>1)</sup>。これは、食事が1日3回摂取されるものであるのに対して、運動実践は多くても1日1回、人によっては週1~3回程度の実践頻度であることや、30分間のウォーキ

ングで消費できるエネルギー量(100~120kcal)がごはん62.5~75g(茶碗半膳)にしか相当しないことを考えると理解しやすい。したがって、食事改善と運動実践を組み合わせることが理想であるが、食事改善だけでも十分な効果が期待できる。一方、運動実践だけによる減量効果は、特に食事改善を伴わない場合には、それほど大きくない。体重過多の状態での急な運動実践は、整形外科的傷害や循環器疾患の事故に遭遇するリスクを高めることから、まずは食事改善、次に運動実践という優先順位で生活習慣の改善に取り組むことが効果的と考えられる。

短期的な減量が達成できれば、次の目標は長期的な減量維持である。国際的に、長期的な減量維持のためには運動実践が重要であるという研究が報告されており<sup>2)</sup>、我々の研究でも同様の結果を得ている。今年から始まった健康日本21(第2次)において、「アクティブガイドー健康づくりのための身体活動指針ー」が作られたが、「いつでもどこでも+10(プラステン)」を意識し、実践することは、長期的な減量維持にも効果的と考えられる。

#### 【文献】

- 1) Nakata Y et al. Factors alleviating metabolic syndrome via diet-induced weight loss with or without exercise in overweight Japanese women. *Prev Med* 48: 351-356, 2009.
- 2) 中田由夫. 肥満に関する介入研究の現状と体重管理における運動の役割. *運動疫学研究* 13: 119-124, 2011.

#### 略 歴

中田 由夫(なかた よしお)

生年と生地 1976年2月 大阪府 富田林市生まれ

#### 学 歴:

1999年3月

早稲田大学人間科学部スポーツ科学科卒業

2001年3月

筑波大学大学院修士課程体育研究科修了 修士(体育学)取得

2004年3月

筑波大学大学院博士課程体育科学研究科修了 博士(体育科学)取得

#### 職 歴:

2004年4月~2007年3月

筑波大学大学院人間総合科学研究科 助手

2007年4月~2007年8月

奈良産業大学教育學術研究センター 講師

2007年9月~2012年3月

筑波大学大学院人間総合科学研究科 助教  
(2011年10月~2012年3月  
筑波大学医学医療系 助教)

2012年4月~現在

筑波大学医学医療系 准教授

#### 学会・専門分野:

主な所属学会

日本体力医学会(評議員、プログラム委員会委員)

日本運動生理学会(評議員)

日本肥満学会(評議員、編集委員)

日本運動疫学会(理事、ホームページ管理運営委員(委員長)、編集委員(副委員長)、セミナー委員、公式声明委員、學術委員)

日本疫学会(評議員)

日本肥満症治療学会(評議員)

日本体育測定評価学会

(理事、研究推進委員、渉外委員)

日本健康支援学会(理事)

日本体育学会

アメリカスポーツ医学会

北米肥満学会

#### 専門分野:生活習慣病学

現在の主な研究内容:食事と運動を中心とした行動変容が生活習慣病の予防および改善に及ぼす影響を明らかにすることを目指しています。



# 一般演題

## 01 ナショナルチームを対象とした 継続的な心理サポートの効果に 関する研究

○中山 正教<sup>1)3)</sup>、山崎 将幸<sup>2)3)</sup>

1)西九州大学 健康福祉学部

2)九州大学

3)日本パラリンピック委員会医・科学・情報サポート  
推進委員

**【目的】**本研究は、ナショナルチームを対象とし2008年北京パラリンピック終了時より現在まで継続的に行っている心理サポートのプログラムの振り返りを行い、効果を検証する事を目的とした。

### 【方法】

1)対象 本研究の対象は、ターゲット型種目のナショナルチーム男女32名(42.3±6.4歳)を対象とした。対象者のうち、男性2名女性2名は、2012年ロンドンパラリンピック代表選手である。

### 2)研究方法

心理サポート方法について:主な心理サポート内容として、2008年度より年3回~4回の合宿時の心理サポート及びメール、電話によるサポートを行っている。合宿による心理サポートは教育プログラムや演習、個別面談を行っている。メール、電話によるサポートについては、大会毎に目標設定シートの提出、確認や日ごろの練習の状況などの聞き取り等を行った。

効果の検証方法について:効果の検証方法として、プログラム内容である個別面談での内容の検証、調査票を用いた心理的競技能力調査(DIPCA-3)の比較を行った。個別面談については、1回のサポートに対し必ず行い、現在までに13回実施している。心理的競技能力調査については毎年年度末の合宿で行い、結果については、次回の個別面談で説明を行っている。

**【結果】**個別面談では、ほとんどの選手において回数を重ねる毎に選手からの質問が増え、心理サポートの必要性がチーム全体に浸透している状況であった。面談の時間についても初回は全選手5分程度だったが、面談を重ねていくうちに増え、現在では1人30分程度の実施状況である。心理的競技能力調査では、全選手の平均値において各項目での向上が見られ、特にターゲット型スポーツに必要な「集中力」、「リラクゼーション能力」、「勝留意欲」の項目で介入前後に有意な向上が認められた( $p < 0.01$ )。

これらの結果より、継続的心理サポートの実施がターゲット型種目ナショナルチームの競技力向上効果につながる事が明らかとなった。

## 02 伴走者の位置が 視覚障がい者ランナーに与える影響 パラリンピック出場選手と 一般ランナーの比較

○湯川 静信<sup>1)</sup>、矢部 京之助<sup>2)</sup>

1)大阪国際大学

2)名古屋大学名誉教授

**【目的】**伴走者(GR)の位置と視覚障がい者ランナー(BR)との腕振り動作に焦点をあて、BRのランニングフォームに与える影響を検討し、伴走方法に寄与することを目的とした。

### 【方法】

①対象者:エリートBR群として、パラリンピックマラソン出場選手男子1名(全盲45歳:2時間51分)、一般BR群として、全盲男子4名:平均53±10.8歳:42~67歳、全盲女子4名:平均39±8.9歳:31~48歳、の計8名(全員マラソン完走者:3時間24分~4時間58分)とした。

②測定・調査方法:BRの位置を、横、斜め前、斜め後ろの3ヶ所とし、腕振りの同期ができるタイプ・腕振りの同期ができないタイプ(GRとBRのガイドロープ側の腕振りが逆になる事)の条件を含めた計6タイプ(A~F)の伴走方法で、直線50mの中間点前後5m間のランニングフォームを側方より高速カメラで撮影を行った。撮影直後、BRに6タイプの伴走方法について聞き取り調査を実施した。分析は2次元動作分析を行った。分析項目は身体重心の水平速度、鉛直変位、上体角、頸部角、ストライド、足先の水平、鉛直変位とした。

### 【結果】

- (1)一番走りやすい伴走方法は、両群Aタイプ(GRの伴走位置が横、腕振りが同期される法)であった。
- (2)一番走りにくい伴走方法は、両群Fタイプ(GRの位置が斜め後ろ、腕振りが同期されない)であった。
- (3)エリートBRはBタイプ(伴走者の位置が斜め前、腕振りの同期される)の水平速度が最も速かった。一般BRは有意な差が見られなかった。
- (4)エリートBRはA、Fタイプ間において上体角、頸部角度は減少した。一般BRは有意な差が見られなかった。
- (5)エリートBRは、A、Fタイプ間においてストライドは短くなったが速度は速くなった。一般BRのストライドは短くなり( $P < 0.05$ )、速度も低下する傾向にあった。

**【結論】**エリートBRは、一般BRよりも伴走者の変化(位置、腕振り)に対して、ランニング速度を維持しながら対応することが示唆された。

## 34 ドイツにおける障害者の 地域スポーツ指導者養成制度と 活用システム

○奥田 睦子  
金沢大学

**【目的】**本研究では、地域スポーツクラブへの障害者の参加に際し、医療保険が適用されるしくみを持つドイツにおいて、それを可能にしている指導者養成制度とその活用システムを明らかにすることを目的とした。

**【方法】**訪独による関係者へのヒアリング、現地でも収集した資料、ドイツ障害者スポーツ連盟公式HPを基に情報を整理した。

**【結果】**ドイツでは、障害者の地域スポーツクラブにおけるスポーツ教室への参加に際して、リハビリテーションスポーツ指導者から指導を受けることで医療保険の適用が可能となることから、地域スポーツクラブでは、リハビリテーションスポーツ指導者が指導にあたっている。リハビリテーションスポーツ指導者養成カリキュラムでは、障害や障害を持った人のスポーツについて基礎的な知識を90単位学んだ後、専門的な学習段階(90~120単位)は、疾患・障害ごとに6つに区分されている。6つの区分とは、整形外科系(癌、脊髄損傷、変形性関節症、人工関節、切断等)、内科系(心臓-循環器系疾患、糖尿病、喘息-アレルギー等)、感覚系(聴覚障害、視覚障害等)、神経系(二分脊椎、小児麻痺、多発性硬化症、脳性運動障害等)、知的障害(注意欠陥障害、学習障害、知的障害等)、精神障害(自閉症スペクトラム、発作性疾患、統合失調症、依存症、パーソナリティ障害等)である。専門領域の分化と共に、罹患者が多いがんや糖尿病等の疾病にも対応しており、様々な障害や疾病に開かれたものとなっている。また、医師のもとには、どのクラブで何の指導ができる指導者がいるのかがわかるリストが州障害者スポーツ連盟から送られており、医師がリハビリテーションスポーツの処方箋を渡す際に、障害者の身近な地域で専門的な指導が受けられるクラブも紹介できるシステムを有している。地域における障害者スポーツ参加の推進には、人・もの・金・情報等のマネジメントの視点の重要性がうかがわれた。

## 35 アダプテッド体育・スポーツ国際 ワークショップの成果と課題

○安井 友康<sup>1)</sup>、山本 理人<sup>2)</sup>、奥田 知靖<sup>2)</sup>、  
大山 祐太<sup>2)</sup>、近藤 尚也<sup>3)</sup>、谷口 広明<sup>3)4)</sup>、  
加藤 琢也<sup>5)</sup>、中道 莉央<sup>1)</sup>

- 1) 北海道教育大学札幌校
- 2) 北海道教育大学岩見沢校
- 3) 札幌あゆみの園
- 4) 北海道美唄養護学校
- 5) 北海道教育大学附属特別支援学校

**【目的】**アダプテッドスポーツに関する地域の理解と実践を広めることを目的に実施された「アダプテッド体育・スポーツ国際ワークショップ in 北海道」について、その開催と準備の経緯、プログラム内容などについて報告するとともにその成果と課題について検討する。

**【実施経緯】**本ワークショップは、平成25年8月23日から26日に北海道の千歳川、札幌、夕張などを会場に、スポーツ活動の実践体験とパネルディスカッションなどを組み合わせて実施された。内外から、計40名あまりが参加し、地域の特性を生かしたアダプテッドスポーツの実施や支援方法について、カヌーなどの体験を通して検討した。さらにパネルディスカッションでは、次世代のアスリート育成における課題や、地域におけるスポーツ参加に対する展望などについて討論が行われた。

**【成果と課題】**参加者や運営者の感想や意見からは、プログラム内容に対する評価する声が聞かれた。また今後、アダプテッド体育・スポーツに関する地域実践を進めるにあたって、検討すべきノウハウの蓄積が図られた。一方で、海外からの参加はほとんどなく、また北海道外からの参加者も少なかった。ワークショップを実施するにあたっては、広報などの課題とともに、参加者のニーズや状況に合わせたプログラムを検討する必要があることがうかがわれた。

## 36 障がい者スポーツに関する 新聞報道の変遷

### ーパラリンピックの新聞報道に 着目してー

○山下 勝也<sup>1)</sup>、藤田 紀昭<sup>2)</sup>

1) 同志社大学スポーツ健康科学研究科

2) 同志社大学スポーツ健康科学部

【目的】障がい者スポーツに関する新聞報道の変遷と特徴を明らかにすることで、障がい者スポーツ普及のための基礎資料を得る事。

【方法】各大会において、オリンピックとパラリンピック両大会の新聞記事の形式分析と、内容分析を行う。分析対象紙は発行部数・購読者数が上位3位である朝日新聞、読売新聞、毎日新聞の3紙の朝刊を対象とする。記事の変遷の把握のためには、過去の両大会の記事を対象とし、現状の把握のためには、2012年に開催されたロンドンオリンピック、パラリンピックを対象とし、分析を行う。記事は大会開催期間の前後1日ずつを含めた期間のみを対象とする。分析の方法としては、形式分析と内容分析に加え、背景の把握を行う。形式分析は対象となる記事の数量、掲載別紙面の分類を行う。内容分析は、対象となる記事を内容ごとにカテゴリーに分類しまとめ、分析を行う。

【結果】1996年アトランタ大会では合計で8件の記事数しか存在しなかったが、1998年の長野大会では合計で155件の記事が存在した。また、1998年長野大会以前は記事が掲載される紙面に関して、スポーツ面と社会面がほぼ同数か社会面の方が多いという結果が得られたが、2000年のシドニー大会以降では、2006年のトリノ大会を除き、社会面よりもスポーツ面に掲載される割合が高いという結果が得られた。2012年ロンドン大会では、74.7%の記事がスポーツ面に掲載された。


【考察】以前はパラリンピックの報道が社会面に多く掲載されていたが、近年になるにつれてスポーツ面での報道が増加傾向にある。

このことは、障がい者スポーツの捉え方がリハビリの一環・福祉としての視点からスポーツの視点へと変化してきているのではないか。

第34回医療体育研究会／第17回日本アダプテッド  
体育・スポーツ学会 第15回合同大会

---

事務局：リハビリテーション体育 Reproud  
〒981-3117 宮城県仙台市泉区市名坂字町80  
TEL：070-6955-2378 FAX：022-375-4555

出版： 株式会社セカンド  
<http://www.secand.jp/>  
〒862-0950 熊本市中央区水前寺4-39-11 ヤマウチビル1F  
TEL：096-382-7793 FAX：096-386-2025

大会事務局

リハビリテーション体育Reproud

<http://15th-itaiiku-jasape.jimdo.com>